

星景写真において、超広角域での焦点距離1mmの差は作品の主役を変えるほど大きな意味を持つ。12～14mmでは、頭上に広がる星空を大きく取り込み、星を主役にしたスケール感のある表現ができる。一方、16～20mmでは構図を整理しながら地上景色の存在感を高め、風景を主役に据えた作品に仕上げやすい。つまり、焦点距離の選択は単なる画角の調整ではなく、「星と風景のどちらを主役にするか」という作品テーマそのものを決定づける。TAMRON 12-20mm F2.8 (Model A084) は、この性格の異なる焦点域を1本でカバーするフルサイズ対応の大口径超広角ズームだ。

解説・作例：北山輝泰

PR企画：株式会社タムロン

TAMRON

天の川を仰ぐ美しの塔【12mm】

美ヶ原高原の象徴、美しの塔と天の川を撮影した。塔との距離をできるだけ詰めることで、そのパースを最大限に強調しながら、背景の空も広く取り込むことができた。さらに三脚を最低位置まで下げ、ローアングルから見上げることで、塔が夜空へ向かって伸びていくような力強さも演出した。12mmという画角の広さは、扱いが難しい反面、被写体をダイナミックに切り取りつつ星空の広大さを表現したい時には大きな武器となる。

SONY α7R V / TAMRON 12-20mm F2.8 (12mm F2.8)
ISO 6400 シャッター速度 15 秒

星空の広さを1本で描く TAMRON 12-20mm F2.8

2026年8月27日発売予定で、希望小売価格はソニー E マウント用が 37万9500 円、ニコン Z マウント用が 39万9960 円。12mm から 20mm までを F2.8 でカバーするズームレンズで、星空の表現領域を本気で広げたい撮影者にとって、強く心を惹かれる 1 本となる。

月刊 星ナビ 2026年9月号

星景構図を自在にコントロール

TAMRON 12-20mm F2.8 の最大の魅力は、やはり広角端 12mm。対角画角は約 122°。人が一度に意識して見渡せる範囲を超えるほど広い空間を捉え、頭上へ伸びる天の川、左右に広がる地上風景、画面手前の岩や草花までを 1 つの空間として組み立てられる。流星群やオーロラのようにできるだけ広い範囲を捉えたい撮影では、この圧倒的な画角の広さが大きな武器となる。

ただし、超広角は「広ければ広いほどよい」わけではない。被写体が小さくなりすぎたり、不要なもののまで画面に入ったりすることもある。その点、20mm までズームできる本レンズなら、地上景色の存在感を高めたり、天の川の濃い部分を主役とすることもできる。12mm で空間を大胆に描き、14～16mm で風景との均衡を整え、20mm で星空の密度を引き出す。この焦点域こそ、星景写真で構図を追いつむためのベストレンジなのである。



周辺像を意識した光学設計

星景写真では短い露光時間で多くの光を取り込める明るさが重要。本レンズは 12mm から 20mm まで F2.8 通しで、夜空が暗い環境でも扱いやすい。高感度撮影に強いカメラが増えたとはいえ、ISO 感度を上げるとノイズが増えるだけでなく、細部の描写が失われたり色再現性が低下したりする。F2.8 は、星景撮影に必要な光量を確保するうえで必須となる明るさだ。

光学系は 12 群 17 枚。XGM（大口径ガラスモールド両面非球面）レンズをはじめ、非球面レンズと特殊硝材を採用し、画面周辺の像の流れや色にじみを抑えている。サジタルコマフレアの補正も優秀で、画面中央だけでなく四隅の星像まで意識して開発されたことがわかる。歪曲収差、周辺光量、倍率色収差の補正については、カメラ内補正を ON にし、RAW 現像時にレンズプロファイルを適用することを前提としている。超広角レンズで生じやすい収差にはデジタル補正を援用することで、レンズの小型・軽量化を図りながら、最終的な画質を整える現代的なレンズ設計といえるだろう。

570 g の機動力と 夜間撮影を支える操作性

これだけの画角と明るさを持ちながら、ソニー E マウント用は全長 119.3mm、質量 570g。ニコン Z マウント用も 121.3mm、585g に抑えられている。星景撮影では三脚や予備バッテリーなどの装備が必要で、フットワークを確保するためにこの軽さと大きさは利点となる。

鏡筒には AF/MF 切り替え、フォーカスセットボタン、カスタムスイッチ、MF ロック、ズームロックなどを備える。暗闇では意図せずリングやスイッチに触れてしまうことがあるため、ピントや画角を固定できる機



レンズ後端のリアフィルターホルダーに星を滲ませるシートフィルターを装着できる。

構は安心だ。公式アプリ「TAMRON Lens Utility」にも対応していて、星景写真のピント合わせに「Astro FC-L」機能も活用できる。

固定式の花型フードとロック付きキャップ、リアフィルターホルダー、簡易防滴構造、防汚コートも屋外で使うレンズとして安心感がある。広角端の最短撮影距離は 0.18m、最大撮影倍率は 1:5.8 である。前景へ大胆に近づき、背後に広大な星空を展開する超広角らしい遠近感を生かした作品作りにも挑戦しやすい。

外観は従来のタムロンレンズの印象から大幅に刷新され、新デザイン「Toned

Profile Next」を初採用した。直線を基調とした精悍なシルエットに加え、ズーム、フォーカス、コントロール、絞りの各リングは、指触りが作り分けられている。手元が見えにくい夜間でも、指先で操作部を判別しやすいデザインである。

12mm の圧倒的な広がり、20mm の構図の作りやすさ。ズーム全域 F2.8 の明るさと、持ち歩ける 570g の軽さ。本レンズは単に「広く写せるレンズ」ではない。星空を主役にする表現から、地上風景を主役にする表現まで、1 本で自在に行き来できる、星景写真の頼もしい相棒である。

南天の光に包まれる灯台【20mm】

ニュージーランド南島のワイパパ灯台で、南天の星々を撮影した。数十年に 1 度ともいわれる大規模な磁気嵐と遠征のタイミングが重なり、脈動するオーロラとともにこの光景を記録できたのは、まさに奇跡といえるだろう。20mm の画角は、灯台の端正なシルエットをしっかりと見せながら、その背後に広がるオーロラと南天の星々も十分に取り込める。地上と空、2 つの主役を自然なバランスで 1 枚に収めることができた。

SONY α7R V / TAMRON 12-20mm F2.8 (20mm F2.8)
ISO 4000 シャッター速度 8 秒